

多摩デポ通信 第54号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2020年4月25日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP / <https://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

通常総会に向けて

理事長 座間直壯

第38回多摩デポ講座として東京都立中央図書館の見学を3月6日に予定していましたが、2月20日にその中止をお知らせしました。新型コロナウイルス感染拡大防止のための措置として、都立図書館がイベント系事業中止を決めたことによるものでした。

その時は長期化するとは予想していませんでしたが、感染の勢いは3月末には加速し、4月16日には遂に全国に緊急事態宣言が发出さ

れる事態となりました。

多摩デポの通常総会については都の窓口と相談を重ねましたが、限られた理事及び事務局員で開催することとし、会員の方々には表決票か委任状の提出でのご参加をお願いすることにしました。本来、会員が一堂に会する貴重な機会でありませんが、感染拡大防止の観点からこのような方法を選択するほかはありませんでした。ご理解ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

図書館の除籍作業の軽微化を視野にTAMALASを開発し、除籍予定図書その他の自治体での所蔵が瞬時

に判別できるようにしました。リストによる一括処理も可能になり、各館の除籍作業の一助に活用されることを期待しています。さらにISBN無しの図書の同定の研究を続けています。13年目を迎え、総会ではあらためて皆様と意見交換をしたいと考えていました。リアルな共同保存図書館への見通しがなかなか明らかにならない現状について、どのような取り組みが必要か、現場に役立つ支援策とは何か、今後の進め方など。総会議案書をお読みになり、議決参加ばかりでなくご意見を寄せられることをお待ちしております。この『通信』等も使って、意見交換したいと思っています。

皆様のご健康と、一日も早く感染拡大が終息することを願っています。

この間の事務局の動き

- 3月4月は、前年度のまとめと新年度計画の作成のため、何回かの会議を予定していたのですが、新型コロナウイルス蔓延による「緊急事態宣言」が出され、「3密を避ける」ため、事務局員はメールや電話でのやりとりを続けています。
- 会議で利用している施設、議案書や通信などの印刷に利用している施設も軒並み使用中止。今回の通信と同封した議案書の印刷は、初めて外部委託することになりました。できあがった印刷物の封筒への封入作業や郵送は、手分けして各自の家内業務……。何人かで集まって情報交換しながらの作業が恋しいものとなりました。少しでも早く元の日常を取り戻したいものです。
- 会員の皆さんと、その周りの方々の健康を願いつつ。

TAMALASを

利用者として使う

堀 渡 (事務局長)

I

多摩デポでは「多摩地域公共図書館蔵書確認システム」を開発し、図書館に「これを使って共同で希少本を残そう」と提案しています。基本の「個別処理」に加え、3年前からは大量にまとめて調べられる「一括処理」を発表し、申請図書館にはID番号を発行しています。タマラスと呼びます。

図書館の活用を想定して作りましたが、「個別処理」は多摩デポのホームページから誰でもアクセスできます。個人がこれを使えば図書館の利用がいろいろ便利になります。本を探す武器に活用してもらえればいいと思ってきました。

私は退職図書館員。現役時は、様々な蔵書を倦まず

選んで借りていく多くの利用者には、尊敬と畏れのような感情を持っていました。自分はそんなにヘビーユーザーではない。(読まないのに) 思い付きで買ってしまいい、本を手元に想いを巡らせるだけが多い。(完読せず関心が移っていく) 私のような者も本当はもっと図書館を使う方がいいのでしょうか。以下、個人がTAMALASを使うヒントになればと、説明を試みます。

II

流通・販売される本には、発行の時点でタイトル毎にISBNという番号が付く。全出版社共通ルールの商品カタログ番号のようなもの。日本には1980年代から広まったが、ここ十数年に出た本なら、背表紙にバーコードの縞とともに、97814で始まる13ケタの数字が書いてある。奥付にも

小さく書いてある。

ISBNがわかればTAMALASを使って、その本を多摩地域のどの自治体が所蔵しているかが瞬時にわかる。試してみると、特に話題でなかった本も不思議とどこかに入っている。

例えば、戦後を代表する思想家故吉本隆明の名著を新たに読み解いて、全く無名の宇田亮一が10年前から次々と本を発表した。やさしく面白い。次第に話題になり新著を所蔵する館も出てきたが、最初の本は1市にしかない(というか、ほとんど非流通のあの本を蔵書にした経緯はどうだったのだろう? 全国でも所蔵館はほとんどない)。古書価も一時は1万円位した。

聴覚障害がある私の家族が求める本。一般の啓蒙書より間口の狭い本。でもたいていはどこかの自治体にはある。これは一例で、誰

にでも自分の事情や関心の領域がある。一般的に「蔵書の充実した館」はあるが、絶対1市だけでは済まない。多摩全体を探せば(たいていは)本はどこかで見つかる。所蔵館は揺れながら、多摩のどこかに存在している。そこで他自治体の本を、依頼して自分の市の図書館に取り寄せられることは御存じでしょう。

でもここでは、さらに違うことを紹介したい。

III

まずAmazonの書籍検索で、探したい(名前など分かる)本のISBNを調べる。TAMALASを立ち上げ、調べたISBN番号を検索窓に入れる。

自動的に動き、その本を多摩のどことどこで持っているか、所蔵自治体が一覧で出てくる(ちなみに、そこで自治体名をクリックすれば

ばその自治体の蔵書検索サイトトに飛び、貸出中なのか、自治体中のどの館の書架にあるかがわかる)。

私は「多摩六都」に住む。西武池袋と西武新宿の沿線の清瀬、小平、西東京(以前は田無と保谷)、東久留米、東村山の近隣5市の地域協力。前は6市だったので、今でもこう呼ぶ。「都」だが、大きな町はない。

5市ではどの市の図書館にも利用登録できる。(どこかで作ったカード番号に登録情報を重ねてくれるので)利用カードは一枚だけ持てばいい。

私には、この「広域利用」が便利だ。所蔵して書架にあり、自分がすぐ読める状況なら自分で借りに行けばいい。無理すればどの市も自転車で行ける範囲。駅近くの分館もある。希望の本が、なるべく多く同じ市で一度に揃うほうがいい。

すぐ入手したい本、一緒に読みたい本、目次や前書きに目を通したい本など、TAMALASの検索窓に本のISBNを5冊とか10冊とか連続して入れる。それぞれを多摩の中で所蔵する自治体が、並んで表示される。私が読むような本は、たいてい5市や10市ぐらいは持っているが、個々を所蔵する市は結構ぶれている。自分が借りられる「多摩六都」で、今一番多く書架にあるのはどの市か? 「ぜひ今読みたい本」が確保でき、それ以外にも多く借りられる市を選ぶ。受取館を(その市内で)自転車で行きやすいか、電車で便利な駅近くの分館に指定して予約を入れる。本が届くタイミングで借りに行く。

IV
4月初旬に、実際こうして検索して行って借りた例

(緊急事態宣言発動直前、図書館は利用者を入館させず、ネット、電話、FAXで予約させ、用意できた蔵書を入力で渡す方法を取っていた)。

どの市でも予約が何十件と殺到したカミュ『ペスト』。しかし世界文学全集本は(蔵書データに収録作品を見せられていない某市だけ)借りられずに残っていた(図書館としてはダメじゃないか、見比べるから見えてくる)。その市でも文庫本は予約30件なのに。その全集本を借りる。

昨年出版の『夢見る帝国図書館』という有難い、出来のいい小説を3月に読んだ。その著者中島京子の本をついでに借りる。

昨年急逝した評論家、加藤典洋の未読の新書。私には何を読んでもまだ刺激的な家族が必要な「聾(ろう)」関連の本を複数一緒に。

2018年放送のNHK『100分de名著!「カミュ『ペスト』』。この4月初旬、全4話一挙に再放送。内田樹がゲスト出演、情熱込めて語られ、とてもいい内容だった。AmazonではTVテキストの古書価が急騰。このテキストにもISBNはあり、TAMALAS検索。多摩で1自治体だけが所蔵隣の市の駅前図書館/間に合わずに借りられてしまった!

そして図書館は今、予約もできなくなつた。その後、何冊か読み終わり、『ペスト』と『書物の破壊の世界史』(フェルナンド・バエス著)という2つの大冊を宿題のように抱え、家にいる(買ってほしいのだが、ただ買うときと読まない、途中まで読めたら買おう)。住まいの周りには大きな

図書館はない。大きな書店もない。退職後はとても寂しい。時間も気分も余裕あれば、立川か池袋に行く。間の駅の書店は、「ついで」がないと降りにくい。

しかし大きな市の真ん中に住む人より利便な点もあるのだと思う。多くの市の図書館に行きやすいのは、体が動けるうちは便利だ。

ここに書いたことはネットが使えることが条件だが、誰でもやれること。どこへも行けない時期にいろいろ研究して、図書館が開いたら、自分なりの使い方を始めてみてください。

TAMALASで簡単に得られる（多摩の蔵書の見取り図）は大きな資源。別の活用もあるでしょう。

放送から十日位あと、『100分de名著！カミュ「ペスト」の増刷？が駅前的小書店にも並んでいた――』

コロナ対応の図書館に カーリルの問題提起

TAMALASで、多摩デポではおなじみのカーリルが、コロナ禍で混乱する図書館界に、カーリルらしいアプローチをしています。「カーリルのブログ」<https://blog.calil.jp/>にぜひ、アクセスしてみてください。

4/9発信 多くの図書館が閉館しています。

4/8より9にカーリルの検索対象の全国の公立図書館（公民館図書含む）1409館のHP情報を目視で確認し、休館状況、休館中や開館継続でのサービス内容をまとめ、元データと併せて、公表しました。

4/16発信 蔵書検索を停止した図書館のバックアップを提供

「対応として図書館の蔵書検索サービスを停止するこ

とには何ら合理的理由がなく……」として、休館だけでなく検索システムやHPまで閉じている5自治体の蔵書・約480万点について、カーリルが持つ過去の検索データを利用した「キッシュュOPAC」を始めました。各図書館のサービス再開まで運用を継続する予定だそうです。

カーリルの調査によると、コロナ対応で次々と図書館サービスが縮小する中でも、検索回数は通常の6割を維持しているそうです。家にもってても、図書館で本を探すが大勢いる証拠。再開を待つて借りたい本を、ネットでブラウジングしているようです。（蓑田明子）

いまなのに、いまだから、 資料防災

東京では、新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながらサービスを提供していた図書館も、緊急事態宣言を受けて軒並み休館。感染リスクの恐れを抱えつつ、館内や在宅で、目下の公務と休館後を見据えた図書館業務に従事されている図書館の皆様感謝申し上げます。

TVの報道は新型コロナウイルス一色のようにさえ思えるこの頃ですが、4月16日に、NHKによる図書館の被害対策に関するアンケート調査の結果が報じられました。また、同日の「おはよう日本」では、台風19号での千曲市の更埴図書館の被災事例と合わせて、東京都立図書館の資料防災の取り組みが紹介され、第37回多摩デポ講座（昨年12月）講師の眞野節雄氏も登場して、防災



の必要性を語られました。

・「図書館の水害対策「行っ
つくな」が6割 NHK
調査」(NHK NEWS WEB,
2020/4/16)

[https://www3.nhk.or.jp/
news/html/20200416/k100
12389481000.html](https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200416/k10012389481000.html)

・「図書館の本 どう水害
から守る」(NHK NEWS
おはよう日本, 2020/4/16)
[https://www.nhk.or.jp/
ohayou/digest/2020/04/04
16.html](https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2020/04/0416.html)

このほか最近の資料防災
に関しての注目すべきニ
ュースとしては、2月に「文
化遺産防災ネットワーク推
進会議の災害時における活
動ガイドライン」の完成・
公表があります。これは、
博物館・美術館などの文化
財関係団体のほか日本図書
館協会も参画する25団体に
よるネットワークが、災害
時の支援要請にどのように
情報共有を行い連携するか

についての基本方針です。

・ [https://ch-drm.nich.go.jp/
news/notice/](https://ch-drm.nich.go.jp/news/notice/)文化遺産防
災ネットワーク推進会議
活動ガイドライン

自然災害は待つてはくれ
ません。我々の住む災害列
島で、もしいま災害があつ
たら避難所は「3密」だと
いう心配も語られはじめま
した。図書館資料に関して
は、梅雨の長雨も夏のゲリ
ラ豪雨も秋の台風も、そし
てもちろん地震も津波も、
いまは被災しても、広範な
救援活動が困難な状況です。
日ごろ防災・減災対策が進
んでいない図書館は、可能
ならば休館期間中に対策に
取り組んではいかがでしょ
う。資料救済キットに入れ
たいエタノールもマスクも
キッチンペーパーも品薄で
入手困難な昨今。それでも、
いまでできることは色々あり
ます。だから未来のために、
少しずつでも。(吉田光美)

多摩デポ関係の新刊

『東日本大震災 あの時の図書館員たち』

未曾有の大地震と大津波、
そして、いまだ収束しない
原発事故。タイトルの通り、
あの大災害に直面した時、
図書館員はどう動き、何を
考えたのか、そして利用者
にとって図書館はどんな存
在だったのか。岩手、宮城、
福島で当時現場にいた45人
の図書館員から寄せられた
体験記が詰まっています。
また被災した地域の地図や、
支援活動の要となった日本
図書館協会による東日本大震災
対策委員による当手を振り
返る対談、活動日録も収録
されています。

多摩デポが係わった活動
では、福島県矢吹町は「ガ
ラス片除去 地域のボラン
ティアと遠隔地からの支援
みんなの思い」を寄せてい
ます。作業して戻した本に

挟んだ破損箇所などのメモ
を見て、ボランティアの被
災地への想いと図書館技術
を感じたとあります。また、
岩手県陸前高田市の地域資
料の救済活動についても関
係者が記しています。

多くの人が極限状態の中
で、「図書館の使命」を感
じたと言います。災害は誰
もが遭遇するだろうこと
です。ぜひ、教訓を学んでお
きたい1冊です。

同書編集委員会編

日本図書館協会発行

ISBN 978-4-8204-1914-3

2000円

(菘田明子)



前川恒雄先生の

突然の訃報に接して

田中ヒロ

日野市立図書館の初代の館長だった前川恒雄氏が、4月10日に89歳で逝去された。心よりご冥福をお祈りいたします。

先生のご功績については、4月15日の毎日新聞、16日の東京新聞の各多摩版でも取り上げられているが、ここでは私個人にとつての先生との思い出を書かせていただく。

1970年代から80年代の初期は、多摩地域の市や町で続々と図書館設置が続いていた。そんな中で私が勤務していた旧都立立川図書館では、「職員も予算も限られた弱小館が都立として存続するためには、どういふ仕事をすればいいのか」と模索が続いていた。検討の結果、都立八王子・青梅・

立川で機能を分担することになり、都立立川図書館は82年に〈逐次刊行物センター〉として再出発した。市町村立図書館の方々に教えてもらいながら仕事を組み立て実践した。――私たちの行動の指針は、「都立図書館は市町村立図書館の望むことをやってほしい。望まないことはやらないでほしい」という先生の考え方であった。

「望まれるのは何なのか」と手探り状態が続いたが、雑誌の協力貸出、申し込まれた資料は一週間以内に届ける、市町村立図書館からの寄贈を積極的に受け入れてバックナンバーの充実を図る、などの事業は徐々に定着し、一定の評価もいただいた。

その間の経験をまとめ、89年に『道 雑誌の協力貸出に取り組んだ都立立川図書館の記録』を刊行した。

その際に思い切って巻頭言をお願いしたところ、快くお引き受けいただくことができた。

「読むうちに同じ苦労を体験したものの一人として、胸の熱くなる思いがする」と言っていたいただいたことは望外の喜びである。

前川先生、ありがとうございました。
(事務局員)

前号記事の訂正

津野海太郎顧問の著書、『最後の読書』の、読売文学賞受賞を紹介しました。「本を読む天皇夫妻と私」(p74)で書かれているのは、平成の明仁天皇と美智子妃。昭和の裕仁天皇ではありません。お詫びし訂正。ぜひお読みください。津野さんすみません。

□ 今号の内容 □

- ・通常総会に向けて 座間直壯
- ・TAMALAS を利用者と 堀 渡
して使う
- ・コロナ対応の図書館にカーリルの
問題提起 蓑田明子
- ・いまなのに、いまだから、
資料防災 吉田光美
- ・関係の新刊『東日本大震災 あの時
の図書館員たち』 蓑田明子
- ・前川恒雄先生の突然の訃報に
接して 田中ヒロ
- ・前号記事の訂正
- ・会の現勢

★会の現勢

2020年4月1日現在

● 正会員

(個人会員 84名)

(団体会員 2団体)

● 賛助会員

(個人 40名)

(団体 1団体)

● 年会費

正会員 (個人・団体) 五千元

賛助会員 一口二千元
(個人一口 団体五口以上)

振込票を同封しました。
よろしくお願ひいたします。